



平成 29 年度 文化庁委託事業 劇場・音楽堂等基盤整備事業

## 地域別 アートマネジメント研修会

■ ■ ■ ■ 報告書 ■ ■ ■ ■

公益社団法人全国公立文化施設協会



## 地域別劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会一覧

地域	日程	実施会場	内容	参加者数・施設数
北海道	技術職員研修会 合同開催 平成29年 11月15日(水) ～11月17日(金)	北海道立道民活動センター (かでの2・7)	1「劇場・ホールとは」 2「施設運営とは」 3「劇場・ホールの事業とは」 4「劇場空間とは」 5「舞台設備とは」 6 オペラ本番実技 7「舞台における事故防止対策」 8「危機管理マニュアルの作成について」	34名 17施設
東北	平成29年 10月6日(金) ～10月7日(土)	八戸市公会堂	1「アイスブレイク・ワークショップ」～自分の ホールのキャラ診断～ 2「文化政策とアートプロジェクト」～南郷ア ートプロジェクトの取り組みを中心に～ 3「文化的commonsとは」～ホールが地域で果た すべきこと～	41名 29施設
関東甲信越静 (自主)	平成29年 11月27日(月)	静岡コンベンションアーツセ ンター グランシップ	1「東京2020文化オリンピックについて」 2 文化プログラム事例紹介 (東京都・新潟市・ 静岡県)	50名 26施設
関東甲信越静 (管理)	平成29年 11月9日(木)	東京国立博物館 平成館大講堂	1「文化政策の動向と今後の展望について」 2「東京オリンピック・パラリンピック文化プロ グラム等について」	129名 81施設
東海北陸	平成29年 10月19日(木) ～10月20日(金)	福井県立音楽堂	1「文化政策の動向と今後の展望について」 2「地域×アートBEPPU PROJECTの活動を事例に」 3「多分野協働、プロ・アマ協働の可能性と課題」	60名 32施設
近畿	技術職員研修会 合同開催 平成30年 2月1日(木) ～2月2日(金)	神戸市立灘区民ホール	1「高所作業における取組・現状・注意点」 2「高所作業における実践編」 3「文化庁、京都への移転 これから」 4「公共ホールにおける良いコンサートを創るた めの条件」 5「公共ホールにおけるコンサートの役割」 6「ホールの特性を活かした音響ミキシングによ るジャズ音楽のアンサンブル」	38名 18施設
中四国	平成29年 12月7日(木) ～12月8日(金)	下関市生涯学習プラザ	1「地域における文化芸術・生涯学習拠点の役割」 2「朝鮮通信使と下関」 3「大人向けリトミック教室」 4 施設見学「下関市立歴史博物館～功山寺」	49名 24施設
九州	平成29年 9月15日(金) ～9月16日(土)	熊本県立劇場	1「地方公共ホールにおいて今後取組が求められ る社会包摂事業について」～実践例、成果と課 題について語る～ 2「熊本地震からの復旧報告」 3「熊本県重要無形文化財・清和文楽人形芝居に ついて」～ホールと地域伝承芸能団体の連携、 その実践例と考察～	69名 45施設

平成 29 年度文化庁委託事業  
北海道地域アートマネジメント・技術職員研修会実施報告

## 開催概要

事業名	平成 29 年度北海道地域アートマネジメント・技術職員研修会
趣旨	劇場音楽堂等の活性化に関する法律の制定及び同法に基づく指針の制定を受け、劇場・音楽堂等の活性化を図るため、公演等企画制作、舞台関係の施設・設備の運用、組織事業の管理運営等、劇場・音楽堂等に必要なノウハウやスキルをもった人材の養成を行うことが一層求められていることから、劇場・音楽堂等に勤務する職員等を対象に、劇場・音楽堂等の運営に必要な基礎及び専門能力の養成を行い、劇場・音楽堂等の運営基盤の充実と活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 11 月 15 日（水）～ 11 月 17 日（金）
会場	北海道立道民活動センター（かでの 2・7） 〒060-0002 北海道札幌市中央区北 2 条西 7 丁目
担当施設	北海道立道民活動センター（かでの 2・7）
参加人数	34 名（参加施設 17 施設）

## 研修計画・日程

	日時	内容	講師等
11/15 (水)	13:30～13:40	開講式	
	13:40～15:00	講義 1「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 1 章「劇場・ホールとは」	講師 柴田英杞氏（(公社) 全国公立文化施設協会アドバイザー）
	15:00～15:10	休憩	
	15:10～16:30	講義 2「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 2 章「施設運営とは」	講師 間瀬勝一氏（(公社) 全国公立文化施設協会アドバイザー）
	16:30～16:40	休憩	
	16:40～18:00	講義 3「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 3 章「劇場・ホールの事業とは」	講師 間瀬勝一氏 柴田英杞氏
	18:30～	情報交換会	
11/16 (木)	9:30～10:50	講義 4 及び実技「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第 4 章「劇場空間とは」	講師 山形等氏（(一社) 日本劇場技術者連盟顧問）
	10:50～11:00	休憩	児山徹氏（帯広市民文化ホール）

	11:00~16:10 ※休憩 12:20~13:20 14:40~14:50	講義5及び実技「劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト」 第5章「舞台設備とは」	舞台技術係係長 夷徳男氏（札幌北海道共立ホール 舞台技術係係長） 吉田仁志氏（音響家協会講師）
	16:10~16:20	休憩	
	16:20~17:30	講義6 オペラ本番実技	オペラ出演 accie(アッチェ)
11/17 (金)	9:30~10:30	講義7「舞台における事故防止対策」	講師 山形等氏 児山徹氏 夷石徳男氏 吉田仁志氏
	10:30~10:40	休憩	
	10:40~11:50	講義8「危機管理マニュアルの作成について」	講師 間瀬勝一氏
	11:50~12:00	閉講式	



挨拶



会場風景

## 研修会記録

### 1 はじめに

北海道地域ではアートマネジメント研修と技術職員研修を合同で3日間の日程で実施した。「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」及び同法に基づく「指針」に謳われているように、人材の専門的な能力の開発の向上が求められている中、基礎的な素養の習得を目的とした。

講義は「平成26年度劇場・音楽堂等人材養成講座テキスト基礎編」に沿って行うものとし、今後の地域内での講師人材の確保を見据え、技術系講師は道内から選出した。

またオペラの実技研修では北海道地域で活動している accie(アッチェ)を招き模擬公演を実施した。

## 2 研修内容

---

### 講義1「劇場・ホールとは」

---

講師：柴田英杞（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

劇場・ホールは社会や国にとってどんな意義があるのかを参加者の意見を交えながらディスカッションした上で、文化芸術振興だけではなく、新しい広場としての在り方や、まちづくりや地域活性化の核として大きな役割を担うべきであるということが、劇場・ホールに課せられている。

更に、あくまでも、「事業」というものは、それを達成するための手段であることを意識すべきとした。

文化芸術基本法、劇場法、指定管理者制度、条例等の制度的な視点から劇場・ホールを見つめ直した後、公会堂からスタートしたその歴史を振り返り、「集会機能型」から「上演機能型」の施設へシフトしてきている。

また、公立の劇場・ホールの役割と使命について、施設が目指すべき「目的」を

- ① 本質的価値（文化芸術振興、地域文化振興）
- ② 社会的価値（社会包摂活動…社会的議題を解決する）
- ③ 経済的価値（地域活性化、シティセールス）

の3つに分類した。それらを果たすべき行動規範を「使命」（ミッション）とし、運営に関わるメンバー全員が共有し、実現に向かって取り組むことが必要であり、プロモーターと異なる点でもあるとした。そのためには、「誰に」「何を提供するのか」「それによって、何が達成されるのか」「そのために、施設はどういった特徴をもたせるのか」を具体的に示す必要性があるとし、随時見直しつつ、時代の変化に合わせていかなければならないとした。

---

### 講義2「施設運営とは」

---

講師：間瀬勝一（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

今回使用しているテキストは施設運営の基礎的な要素として知っていてほしい内容をまとめたものである。文化振興を仕事として市民に接する方は、ぜひ習熟して欲しいものであるとし、例としてコンビニエンスストアのアルバイト店員が自店の商品について、どこに何があるかの確に回答できるのに対し、ホール職員が舞台設備に関しての問合せにほとんど答えられない事例を挙げ、最低限テキストにある内容は頭に入れておく必要があると強調された。

・業務と組織について

- ① 公立の劇場・ホールの利用料金は、公的資金を投入して運営を成立させていることから、一般の劇場やホールに比べて安い。
- ② 公共的な劇場・ホールは地域の財産であることから、多くの人に利用してもらうための地域文化施設として、施設や設備、サービスに至るまで常に最良の状態を保たなければならない。それは集客にも大きく影響してくることが考えられる。
- ③ 劇場・ホールの運営組織の形態として館長の下に設備管理等を担う管理部門と受付や舞台運営などの事業部門を配置することが一般的である。

- ④事業を積極的に展開するために広報・営業に特化した部門を設けるべきだと考える。
- ⑤劇場・ホールの設備は基本的にはオーダー品で構成されていることから、専門知識と経験をもった人員を配置し、質の高い管理運営を利用者に継続的に提供することが求められている。

・財源と収支について

- ①維持管理費が支出の多くを占めており、地域の劇場・ホールにおいて運営費削減や人件費の削減傾向が強まってきているなかで、多様な自主財源の確保が必要である。
- ②助成金獲得のための4つのポイントとして、まず、誰のため、何のための事業か明確にすること、2つ目に補助、助成制度の趣旨目的を理解すること、3つ目に応募書類は別の職員に読んでもらうこと、最後に積算、会計処理を適正に示すことが肝要である。

・公立の劇場・ホールにおける評価制度について

- ①使命（ミッション）の達成度を測ることが評価の基本となる。
- ②評価を基にPDCAサイクルをすることで、サービスの質を向上させる。

・危機管理とリスク対応について

- ①施設利用者と安全意識を共有することに努めなければならない。
- ②トラブル対応について、内部的要因（人為的要因、物的要因、制度的要因）について発生するものを整理し、管理者として予防に徹しなければならない。
- ③クレーム対応について、サービス業の自覚を持ちつつ、聞く姿勢と誠意を示し、初期対応を迅速に行うことが大事である。



講義 1



講義 2

---

### 講義 3「劇場・ホールの事業とは」

---

講師：間瀬勝一（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー  
柴田英紀（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

柴田氏から事業には4つの活動領域があると説明があり①文化芸術への場の提供 ②鑑賞機会の提供 ③文化芸術の普及・啓発 ④優れた舞台芸術の創造・育成があると説明があった。

①②③の領域の事業が全体の8割を占めている。加えて、展開される事業は貸館事業と自主（文化）事業の2つに分類される。貸館事業は「文化芸術への場の提供」として重要な文化活動支援事

業であることを理解しなければならない。また、自主公演事業実施にあたり、企画立案から実施後の事務業務まで2年近くの時間が必要であることや企画立案の時点で全ての方針の大枠が決まることから、6W2Hを念頭に置き、練り上げていかなければならないと説明があった。

次に、間瀬氏から施設の受付担当員においても、どのような設備、機材がどのくらいあるのかということも理解していなければならない。自分の担当業務のみならず施設全体を把握するという意識が大切であることや自主公演事業企画立案のポイントとして、幅広い視野で地域の文化資源を捉えること（地域の特性やニーズ、文化的資源を見極め、反映すること）、公演主催者、公演当事者としての意識を強くもつこと、事業担当者は、目の前の事業実施に夢中になり、事業自体を目的化する傾向にあるので、様々な事業は、劇場・ホールの使命（ミッション）を達成するための手段であるということ強く認識しなければならないと説明があった。

---

## 講義4「劇場空間とは」

---

講師：山形 等 （一社）日本劇場技術者連盟顧問  
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長  
夷石徳男 （株）北海道共立ホール課主任  
吉田仁志 音響家協会講師

山形氏から舞台の形式から「オープン舞台」と「プロセニウム型の劇場」の説明があり、景観を含めた施設全体の環境づくり施設（劇場）で行われる活動を結びつける役割を担うものが組織であり職員であると説明があった。

児山氏から太陽光に頼っていた舞台照明設備が現在の電気照明に至るまでの歴史の説明があり、光を表現するには、方向、大小、強弱、色彩があり、ボーダーライトで実際に実験をするとともに、実際に使用されることが多い照明灯具を実際に点灯し、特徴や使用シーンを説明し、舞台照明の色について、カラーフィルターは8色総分類により分けられ、国内外で分け方や名称が異なると説明があった。

吉田氏は、平台と箱足の組み方を実際に組みながら説明し、平台のやっつけはいけない組み方や吊物の結び方等を説明した。

また、自身が体験した事故の例を交えながら、舞台の設営から撤収に至るまで安全への意識のレベルを高く保つことが肝要であるとした。

夷石氏から、スピーカー及びマイクには様々な種類と使用用途があり、実際に集音の方向が異なるマイクを使用して、その違いを説明した。



講義3



講義4

---

## 講義 5 「舞台設備とは」

---

講師：山形 等 (一社)日本劇場技術者連盟顧問  
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長  
夷石徳男 (株)北海道共立ホール課主任  
吉田仁志 音響家協会講師

児山氏から、舞台照明設備の歴史を野外で演劇等が行われていた時代から始まり、19世紀に入りガス灯が使われるようになった時代から現代までの変遷をテキストに沿って説明があった。また、遠山静雄著「舞台照明学」の舞台照明の定義を引用し、舞台照明が与える様々な影響や効果についてや劇場の照明設備で演者がどのように見えるのかを講師自らを題材にして解説し、加法混色や減法混色などを舞台上で実演した。

さらに、舞台照明に必要な舞台照明器具等を実際に舞台上に準備し説明があった。

---

## 講義 6 「オペラ本番実技」

---

講師：山形 等 (一社)日本劇場技術者連盟顧問  
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長  
夷石徳男 (株)北海道共立ホール課主任  
吉田仁志 音響家協会講師  
出演：accie(アッチェ)

各研修生等は、希望する担当業務(舞台・照明・音響)に分かれ、準備、リハーサル等を各講師から説明を受けながら実際に体験し、本番を見立てた模擬公演を実施した。リハーサルや模擬公演本番中も参加者同士が互いに声を掛け合いながら実技を行い、最後に参加者全員で舞台上の撤去作業を行った。

---

## 講義 7 「舞台における事故防止対策」

---

講師：山形 等 (一社)日本劇場技術者連盟顧問  
児山 徹 帯広市民文化ホール舞台技術係係長  
夷石徳男 (株)北海道共立ホール課主任  
吉田仁志 音響家協会講師

山形氏から、事故には予兆・前兆が必ずあるので、普段から点検等を行う際には些細な点でも気に掛けることが重要であると説明があり、受付や管理を担当する職員は日頃から現場の保守・点検の書類を確認し、自館の状態を常に把握する必要がある。その上で現場の人が使いやすいように改修・修繕することが望ましいとした。

また、技術担当者や外部委託の場合等でも施設管理者と気軽に意見交換できる環境づくりが必要であり、何が危険かを認識することが大切であるので、そのために日頃から知識を蓄える必要があると説明があった。



---

## 講義 8 「危機管理マニュアルの作成について」

---

講師：間瀬勝一（公社）全国公立文化施設協会アドバイザー

間瀬氏から、劇場等は来館される全ての方々が安心・安全で心豊かな時を過ごせる場所になるために安全対策を講じる必要があると説明があった。

また、災害時は一時避難場所として活用されるため不測の事態にも対応が求められると説明があった。

マニュアルの作成については、危機管理マニュアルは目的・定義・組織体制・役割責任を明確にして作成する必要があることや地震災害や火災など様々なケースを想定し、不測の事態にも対応手順を定め、作成後もマニュアルの再点検を行い、修正を加えること、施設全体で行う訓練は実際の勤務に合わせて少人数で実施する必要があることや劇場では公演の継続中止判断が必要になることから、その点を盛り込んだ危機管理マニュアルにする必要があると説明があった。



オペラ本番実技

### 3 研修を終えて

参加者の多くが、初任者や事務方であったためアートマネジメント研修と技術職員研修を同時に受講することができたことは、この形態での研修実施の最大のメリットであったと思います。

また、全国研修会でしか聞けない講師の講義が聞くことができたこと、さらに日常的に習得することが困難な技術や経験談等を技術専門講師から直接参加者が体感し理解することができたことからとても有意義であったと感じます。

舞台装置や照明、音響装置を直接参加者が手で触れ、操作することにより得られる難しさや楽しさと言った部分を参加者が直接身をもって頭で知る・身体で体感することが出来たのではないだろうか。

そのような研修内容であったためか、参加者から回収したアンケートでは、多くの参加者から「満足」の評価を頂戴し、「とても勉強になった」「非常に濃い内容で、もう少し時間を増やしてほしい」「今後のホール運営に役立てたい」と言った満足度の高いご意見を頂戴することが出来ました。

アートマネジメント及び技術職員研修の合同開催と研修内容の両方から大きな収穫及び成果があったと思います。

平成 29 年度文化庁委託事業  
東北地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会

## 開催概要

事業名	平成 29 年度東北地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
趣 旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより、職員の専門性の向上及び地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資することを目的として開催する。
開催期間	平成 29 年 10 月 6 日（金）～ 10 月 7 日（土）
会 場	八戸市公会堂 〒031-0075 青森県八戸市内丸 1-1-1
担当施設	八戸市公会堂
参加人数	41 名（参加施設 29 施設）

## 研修計画・日程

	日時	内容	講師等
10/6 (金)	13:00～13:30	受付	
	13:30～14:00	開講式、オリエンテーション	
	14:00～14:30	講義Ⅰ「アイスブレイク・ワークショップ」～自分のホールのキャラ診断～	講師 大澤苑美氏（八戸市芸術環境創造専門員）
	14:30～14:40	休憩	
	14:40～16:40	講義Ⅱ「文化政策とアートプロジェクト」～南郷アートプロジェクトの取り組みを中心に～	講師 大澤苑美氏 奥山裕氏（八戸市南郷文化ホール館長）
	16:40～16:50	事務連絡	
	18:00～21:00	《自由参加》 アートプロジェクト「酔っ払いに愛を2017／横丁オンリーユー・シアター」 見学	
10/7 (土)	9:00～9:30	受付	
	9:30～11:30	講義Ⅲ「文化的コモンズとは」 ～ホールが地域で果たすべきこと～	講師 大澤寅雄氏（(株)ニッセイ基礎研究所・ 芸術文化プロジェクト室主任研究員）
	11:30～11:45	閉講式	

---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

平成 29 年度の文化庁委託事業「東北地域アートマネジメント研修会」は 10 月 6 日と 7 日の両日、八戸市公会堂において開催されました。

今回の研修会は、ホールとして取り組むアートプロジェクトの意義を考え、受講生がプロジェクトの企画・制作に関するノウハウを学び持ち帰り実践することで、東北地域各ホールにおけるアートプロジェクト活動が地域活性化に繋がっていくことを期待してのプログラム構成といたしました。

1 日目は、震災直後の 2011 年春に活動の場を東京から八戸に移し、ダンスとジャズを核とした「南郷アートプロジェクト」を立ち上げた大澤苑美氏と、その舞台となる南郷地域にある文化ホール館長の奥山裕氏に活動事例の紹介を交えながら、ホール運営の視点からアートプロジェクト活動についてお話しいただきました。

2 日目は、(株)ニッセイ基礎研究所・芸術文化プロジェクト室の大澤寅雄氏に文化的コモンスの形成という考え方からアートプロジェクトやアウトリーチ等、ホール外で行う活動でのホールの役割等についてお話しいただきました。

### 2 研修内容

---

#### 講義 I 「アイスブレイク・ワークショップ」～自分のホールのキャラ診断～

---

講師：大澤苑美（八戸市芸術環境創造専門員）

自分の所属するホールの特徴は何なのか。ホールのイメージを相手に伝える手法として、自らのホールを他のジャンルの分野（飲食店、スポーツ）に例えて説明してみるという、ホールのキャラクター、ミッションについて考えるワークショップを行いました。

講師からの「飲食店だったら、どのような形態の何を提供している店なのか」、「スポーツだったら、どのような客層が集まる、どんな種目に例えるか」の問いかけに対し、ホールごとに受講者がそれぞれ説明を加えて発表しました。

飲食店では「惜しまれつつ閉店する駅前のファミリーレストラン」、「特別感のある老舗の和食料亭」、「昔ながらの味が愛され続ける定食屋」、スポーツでは「8 人しか部員がないコアな野球部」、「複合競技でありながらも刺激は強いトライアスロン」等に例えられ、それぞれのイメージ像から各ホールが持っている『こだわり』や、運営に関わっている人や関係機関との連携の様子を知ることができました。

受講者には、自分の所属するホールと他のホールの特徴を比較することができたと同時に、同調できる部分、異なる部分に気づける機会となったようです。

講師からは、ホールの特徴（長所、短所を含めて）を再認識することで、より地域住民に親しまれるホールとなれるような施設運営、事業展開に繋がられるのではないかとのアドバイスをいただきました。

---

## 講義Ⅱ「文化政策とアートプロジェクト」～南郷アートプロジェクトの取り組みを中心に～

---

講師：大澤苑美（八戸市芸術環境創造専門員）  
奥山 裕（八戸市南郷文化ホール館長）

はじめに、大澤講師から「アートプロジェクトの概念」について、次のとおり解説がありました。

### ◆「アートプロジェクトとは」

- ・ 現代美術を中心に、おもに 1990 年代以降、日本各地で展開されている共創的芸術活動。
- ・ 作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入り込んで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。
- ・ 既存の回路とは異なる接続／接触のきっかけとなることで、新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動。

アートプロジェクトは、アートに全く関心がなかった一般の人々を巻き込みつつ、さまざまな人々の『気づき』を繋げていくことで、プロとアマチュア、さらには一般社会の無関心と、幾重にも分断されていた現代芸術の世界を共創の場へと変貌させていく（※熊倉純子監修「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」から引用）。

引き続き奥山講師とともに、映像による事例紹介を交えながら南郷アートプロジェクトに取り組んだことで得られたもの、これから克服していかなければならない課題等をホール運営の視点を含め、以下の内容でお話いただきました。

### ◆「南郷アートプロジェクトで目指したこと」

- ・ アーティストと地域住民が交流し、日常的に創造的活動が行われるとともに、アート（アーティスト）を受け入れ、新しい発想が誘発される地域となるような「**創造的活動拠点づくり**」。
- ・ 魅力的な地域資源をブランド化し、対外的に情報発信できるとともに、地域に埋もれた歴史や資源を見える化して活用できる地域となるような「**地域資源の再発見と有効活用**」。
- ・ 住民の自主的なアイデアをベースとした活動が活発に行われるとともに、地域愛を持つ住民の有機的な関係性（絆）が構築される地域となるような「**主体的な市民づくり**」。

アートのまちづくりに取り組んでいる八戸市で活動するにあたって、講師が「南郷アートプロジェクトの取り組みで目指したこと」であり、ホールが「地域にとって文化の駆け込み寺のようになれば」との想いが込められています。



講義Ⅰ「アイスブレイク・ワークショップ」



講義Ⅱ「文化政策とアートプロジェクト」

---

## 講義Ⅲ「文化的コモンズとは」～ホールが地域で果たすべきこと～

---

講師：大澤寅雄（(株)ニッセイ基礎研究所・芸術文化プロジェクト室主任研究員）

アートプロジェクトやアウトリーチなどのホールの外で行われる活動について、どのような根拠やポリシーを持ち、周りに説明していくべきなのか。文化的コモンズという観点からホールの役割等について、以下の内容でお話いただきました。

### ①「文化芸術の社会への活用」

- ・文化芸術が地域社会や住民の活力創出等に対して、どのような効果を与え、どのような可能性を有しているか、また、どのようなアプローチが必要か。
- ・地域の人々にとって「このホールが必要か否か」という究極の問いに対峙した時に確実に必要とされるよう、地域の文化拠点としてどのような取り組みをしていくか。
- ・ホールは文化的な繋がりを求めて人々が集まる文化拠点を目指し、様々な文化の担い手とも手を結び、文化的コモンズの形成を牽引する役割を担うべき。
- ・文化的コモンズとは、地域の共同体の誰もが自由に参加できる「入会地」のような文化的営みの総体。地域における様々な文化に係わる担い手（文化団体、教育機関、福祉施設、まちづくり団体、民間企業等）の活動が文化的コモンズの形成に不可欠。

### ②「アウトリーチと地域文化の生態系」

- ・アウトリーチ活動は、ホールを普段利用しなくても文化施設の重要性や意義を認識している「サイレント・パトロン」とでも呼べる支持層の人を増大させる可能性を持っている。
- ・文化芸術においても生態系はあり、生産者、消費者、分解者によって形成される。生態系は循環しており、文化生態系の小さな循環を拠点となって拡張していくことがホールの役割。

### ③「公共ホールの大規模改修問題」

- ・高度経済成長期に整備された文化施設が開館後 40 年から 50 年を経過し、建て替えや大規模改修が求められる時期にあることから、施設の劣化状況や取り巻く環境を総合的に把握したうえでの効率的かつ効果的な整備計画の策定が重要。

### ④「文化芸術振興基本法」から「文化芸術基本法」へ。

- ・文化芸術の振興にとどまらず、各関連分野における施策を法律の範囲に取り込み、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが趣旨。

### ⑤「文化的コモンズの形成に向けて」

- ・以下のテーマでディスカッションを実施。
  - ◆あなた自身は、誰と誰の間を繋いでいますか。
  - ◆あなたのホールは、どんな人・団体・機関と繋がっていますか。
  - ◆あなたのホールに足りないものは何ですか。
  - ◆文化的コモンズを形成するためには、どうすればいいでしょうか。



講義Ⅲ「文化的コモンズとは」

### 3 研修を終えて

研修会では、受講生それぞれに自らのホールの役割を改めて考えていただきました。さらに、文化的commonsの形成という観点からホールの事業活動を考え、それに基づいてのアートプロジェクトの取り組み、活動をテーマに据え、実際に企画・運営・コーディネート等に携わっている講師陣に、現場からの視点でお話いただきました。

受講生からは「公共施設に求められているものが変化してきていることを改めて感じた」、「アートマネジメントやホール運営事業は人と人との繋がりがないと形成されない。それがアートプロジェクトの成功、文化的commonsの形成においてとても大切だと学んだ」、「コーディネーターの存在の大きさを痛感した」、「文化的commonsの話は自分の中で会館の方向性をどのように進めていけば良いのか、ぼんやりしていた部分の整理が少しいた。まずは持ち帰って行動に移したい」といった感想をいただき、研修内容については概ね高い評価をいただきました。

また、今回の研修会は、7組のアーティストが市内中心街に点在する8つの横丁にある店舗や路地を劇場に見立てて、ダンスやトークショー等のパフォーマンスを繰り広げるアートプロジェクト「酔っ払いに愛を2017／横丁オンリーユー・シアター」の開催日に日程を合わせて実施いたしました。

事務局として、実際にアートプロジェクトを体験していただきたいという想いもあり、研修プログラムの番外編として自由参加の形で受講生に鑑賞していただいたもので、このイベントへ参加した受講生からの評判も上々でした。

最後に、今回の研修会から今後ホールの事業展開を図っていくうえでのヒントが得られ、参加された方々にとって多少なりともお役に立てたのであれば幸いです。



自由参加「酔っ払いに愛を2017／横丁オンリーユー・シアター」

平成 29 年度文化庁委託事業  
 関東甲信越静地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会

**開催概要**

事業名	平成 29 年度関東甲信越静地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
趣 旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行う研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 11 月 27 日 (月)
会 場	静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 〒422-8005 静岡県静岡市駿河区東静岡 1-35-10
担当施設	静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ
参加人数	50 名 (参加施設 26 施設)

**研修計画・日程**

日時		内容	講師等
11/27 (月)	13:30~13:40	開会 開講式	
	13:40~14:50	【基調講演】 「東京 2020 文化オリンピックアードについて」	講師 堀 和憲氏 ((公財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 企画財務局アクション&レガシー部 担当課長)
	14:50~15:00	休憩	
	15:00~15:30	【文化プログラム事例紹介】 ① 東京都「2020 年に向けた東京文化プログラムの概要」	講師 窪田知恵氏 (アーツカウンシル東京 主任)
	15:30~16:00	② 新潟市「新潟での文化プログラムへの取り組み事業紹介」	講師 福島尚子氏 (アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー)
	16:00~16:30	③ 静岡県「静岡県文化プログラムのねらいと公立文化施設 モデルプログラム、提案プログラムの取組から」	講師 岩瀬智久氏 (静岡県 文化・観光部 化政策課 専門監)
	16:30~16:40	閉会 閉講式	

---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行う研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資することを目的として実施。

### 2 研修内容

---

#### 基調講演 「東京 2020 文化オリンピックアードについて」

---

講師：堀和憲（（公財）東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 企画財務局アクション&レガシー部 担当課長）

##### ○東京 2020 参画プログラム（東京 2020 文化オリンピックアード）

オリンピズムの理想から、オリンピックムーブメントが生まれている。

今回の大会ビジョンは「すべての人が自己ベストを目指し（全員が自己ベスト）」、「一人ひとりが互いを認め合い（多様性と調和）」、「そして、未来につなげよう（未来への継承）」という3つの基本コンセプトとし、史上最もイノベーティブで世界にポジティブな改革をもたらす大会とする。

東京 2020 参画プログラムとは、東京 2020 大会を契機として、スポーツだけでなく、文化芸術や地域における世代を超えた活動、被災地への支援などにオールジャパンで皆が参加し、未来につなぐプログラムである。

（2017年10月時点）認証件数： 20,000件 参加人数： 500万人

##### ○東京 2020 Nippon フェスティバル

「参画」、「日本らしさ」、「卓越性」、「多様性」、「レガシー」を目指すビジョンに設定。都道府県と連携した「オールジャパン」で取り組むことを目指している。



基調講演



基調講演



---

## 文化プログラム事例紹介

### ① 東京都：2020年に向けた東京文化プログラムの概要

---

講師：窪田 知恵（アーツカウンシル東京 主任）

#### ○リオ大会での東京の文化関連プログラム（リーディング・プロジェクト）の紹介

- ①CULTURE & TOKYO (Passo Imperial) ※リオ大会後に日本国内でも開催
- ②TOHOKU & TOKYO

#### ○アーツカウンシル東京の位置づけ

- ・平成18年に東京都文化振興条例を改正し、平成19年に文化振興のための施策を総合的かつ効果的に推進するための政策提言を行う知事の附属機関として「東京芸術文化評議会」を設置。この「東京芸術文化評議会」での提言を受け、また、提言の実働部隊として、アーツカウンシル東京の設立を進め、平成24年11月に東京都歴史文化財団内に設置された。

#### ○東京文化プログラムとは

- ・東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団及び公益財団法人東京都交響楽団が、2020年に向けて実施・支援する様々な文化事業。
- ・2020年に向けて、助成事業を拡充するとともに、企画の公募や東京キャラバン、TURNといった文化プログラムを牽引する事業を展開することで、より多くの都民が文化プログラムに参加できる機会づくりを進め、「東京文化プログラム」を展開。

---

## 文化プログラム事例紹介

### ② 新潟市：新潟での文化プログラムへの取り組み事業紹介

---

講師：福島尚子（アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー）

#### ○アーツカウンシル新潟のミッション

- ・市民の文化芸術活動の支援、調査・研究、情報発信、企画・立案

#### ○文化プログラムへの取り組み：予算総額 500万円、上限 100万円/件

- ・美術分野における市内組織基盤の形成と新たな可能性に関する調査研究
- ・「にいがた水文化連絡会議」設立に向けた取り組み
- ・「にいがた食文化協議会」の設立準備
- ・市内のデザイン分野における組織基盤の強化及び新たな可能性に関する調査研究
- ・ソーシャルインクルージョンと創作表現活動に関する基盤強化及び新たな可能性に関する調査研究
- ・文化芸術を活用したエリアマネジメントの取り組みに向けた検討
- ・社会が抱える課題に音楽で介入する可能性に関する調査研究
- ・「(仮称)新潟市農村文化協議会」の設立



文化プログラム事例紹介①東京都



文化プログラム事例紹介②新潟市

## 文化プログラム事例紹介

### ③ 静岡県：静岡県文化プログラムのねらいと公立文化施設ーモデルプログラム、提案プログラムの取組からー

講師：岩瀬智久（静岡県文化・観光部文化政策課 専門監）

#### ○静岡県の文化プログラムー基本的な方針

- ・ テーマ「地域とアートが共鳴する」
- ・ 多様性：地域、社会、時代、国籍等における多様性を生かす
- ・ 多極性：大規模・集中的ではない、県内各地の文化資源を生かした多極的な展開
- ・ 持続性：一過性のイベントではない、2020年以降を視野に入れた持続的な展開

#### ○静岡県文化プログラムーモデルプログラムの実施

- ・ 目的：①基本方針の具体的例示  
②静岡県文化プログラム（仮称）に向けた経験の蓄積（担い手、推進委員会ともに）
- ・ 内容：文化・芸術分野×地域・社会的課題  
応募 80 件の中から 10 件選定し、1 事業当たり平均 3,000 千円弱の負担金を静岡県文化プログラム推進委員会から支出



文化プログラム事例紹介③静岡県



質疑応答

### 3 研修を終えて

- ・ 今回の基調講演では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会からの報告があり、「オリンピック」を意識した文化プログラムの動きを学んだ。これまでの取組みと、今後「東京 2020 Nippon フェスティバル」についての説明を受け、文化プログラムは東京だけではなく全国各地「オールジャパン」で取り組む姿勢を感じることができた。
- ・ 「東京」、「新潟」、「静岡」と比較しながらそれぞれの地域における「文化プログラム」を知り、様々な視点から目指す方向性やミッション、現在の問題点や課題等、実際に取り組まれている団体の実情を知ることができた。

平成 29 年度文化庁委託事業  
関東甲信越静地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会

## 開催概要

事業名	平成 29 年度関東甲信越静地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象に、施設の管理運営を行う上で直面している課題について専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 11 月 9 日（木）
会場	東京国立博物館 平成館大講堂 〒110-8712 東京都台東区上野公園 13-9
担当施設	神奈川県民ホール
参加人数	129 名（参加施設 81 施設）

## 研修計画・日程

日時	内容	講師等	
11/9 (木)	13:30~13:40	開会 開講式	
	13:40~14:20	講演① 「文化政策の動向と今後の展望について」 文化芸術振興基本法の改正、文化庁の京都移転、平成 30 年度概算要求など、今後の文化政策。	講師 藤原章夫氏（文化庁文化部長）
	14:20~14:40	質疑応答	
	14:40~14:55	休憩	
	14:55~15:35	講演② 「東京オリンピック・パラリンピック文化プログラム等について」 日本全国の公立文化施設で取り組む意義等。	講師 太下義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)芸術・文化政策センター長）
	15:35~15:55	質疑応答	
	16:00	閉会 閉講式	

---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

2020年の東京オリンピック・パラリンピック（以下、2020東京大会）開催決定以来、その「文化プログラム」の推進等により公立文化施設としての一層の活性化が期待されている。

2020東京大会の開催地であるかどうかに関わりなく、この機会をどのように捉えていくかが今後の大きな課題である。このような背景から、文化庁より、国としての方針や予算等の説明を直接伺い、あわせて、民間のシンクタンクの専門家より、今までの「文化プログラム」、その効果も含めた分析レポートを聞く研修内容とする。このことにより、各施設における今後の運営のヒントを得ることを目指す。

### 2 研修内容

---

#### 講演1「文化政策の動向と今後の展望について」

---

講師：藤原章夫（文化庁文化部長）

国として文化政策にどのように取り組んでいくのか、その考え方や具体的な施策について、詳細なスライドによる講演。

文化芸術基本法の改正によって、公立文化施設に新たに求められていること、平成30年度文化庁予算の概算要求の概要、また、2020東京大会に向けて、文化プログラムの位置づけや目的、劇場のバリアフリー化への制度の整備など、劇場、音楽堂等に直接的に関わる現在の政策や今後の展望について説明が行われた。

---

#### 講演2「東京オリンピック・パラリンピック文化プログラム等について」

---

講師：太下義之（三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) 芸術・文化政策センター長）

2020東京大会に向け、全国の劇場・ホールで文化プログラムを推進する際に必要な考え方についての講演。

そもそも、オリンピックにおける文化プログラムとはなにか。レガシーといわれているものはなにか。これらを、ロンドン、リオの事例を元に解説。そして、これら過去の例を踏まえ、全国の劇場・音楽堂等が、新しい「2020東京大会版レガシー」となる文化プログラムを考えるときに、必要な知識とポイントを明示する内容で進められた。

### 3 研修を終えて

#### ①事業評価

参加者が、81 施設から 129 名、その内訳も文化施設のみならず、東京都をはじめ行政の文化担当者の参加も多く、関心の高いテーマの研修会となった。藤原氏、太下氏とも、ボリュームが多い内容であった。このうち藤原氏の講義は、国の政策方針の説明であるため、政策の基本を理解したい参加者（管理者）と、事業立案に直接役立つ具体的な情報を得たいと思う参加者（事業担当者）では満足度が異なった。

#### ②研修会の意義

文化プログラムは、基準や内容の良し悪しが問われるものではなく、ひとつの「動き/ムーブメント」であるということが、両者からの講義で明らかになった。

特に、太下氏からは、2020 東京大会のレガシーのテーマについて、非常に有益な発言もあった。このことは、2020 東京大会の開催地であるかどうかを問わず、それぞれの地域で文化プログラムへ取り組む際の大きなヒントとなると思われる。

また、藤原氏からの説明は、ともすれば上意下達の要求だけが伝えられる市町村施設の職員にとって、なぜそうした施策がとられるのかという背景を知ることにより、地域の課題を把握する上で参考になったものと思われる。

#### ③今後の課題について

今回の講座のテーマが、今後の文化施設の運営や、事業計画立案に寄与するためのものであったため、内容が多く、時間が短いといった声もあった。日程の時間の設定についても検討が必要である。



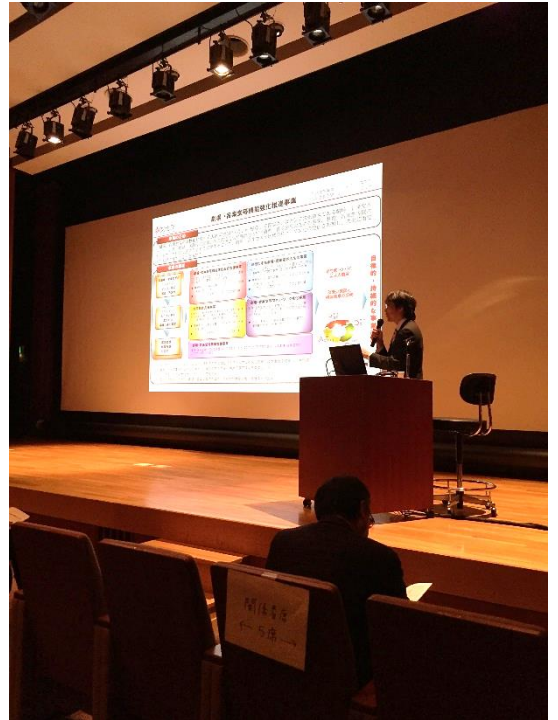
会場 ロビー受付



部会長挨拶



文化庁藤原氏講義



文化庁藤原氏質疑応答



太下氏 講義



太下氏 質疑応答

平成 29 年度文化庁委託事業  
東海北陸地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会

## 開催概要

事業名	平成 29 年度東海北陸地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
趣 旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 10 月 19 日（木）～ 10 月 20 日（金）
会 場	福井県立音楽堂 〒918-8152 福井県福井市今市町 40 号 1 番地 1
担当施設	福井県立音楽堂
参加人数	60 名（参加施設 32 施設）

## 研修計画・日程

日時		内容	講師等
10/19 (木)	12:45～13:15	受付	
	13:15～13:30	開講式	
	13:30～14:30	【研修会Ⅰ】「文化政策の動向と今後の展望について」	講師 時川修司氏（文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室 室長補佐）
	14:30～14:45	休憩	
	14:45～17:00	【研修会Ⅱ】「地域×アート BEPPU PROJECT の活動を事例に」	講師 横山恭子氏（（特非）BEPPU PROJECT / オフィスケイワイ代表）
	17:15～17:30	施設見学会	
	17:30～19:00	情報交換会	
10/20 (金)	10:00～12:00	【研修会Ⅲ】「多分野協働、プロ・アマ協働の可能性と課題」	プレゼンター 橋本恭一氏（（公財）福井県文化振興事業団 プロデューサー） 星谷丈生氏（作曲家） 川島洋一氏（福井工業大学 教授） アドバイザー 田村孝子氏（（公社）全国公立文化施設協会 副会長） 演奏 越のルビーアーティスト
	12:00～12:15	閉講式	



---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

平成 29 年 10 月 19 日、20 日に「平成 29 年度東海北陸地域 劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会」を福井県立音楽堂で開催した。

会場である福井県立音楽堂は、「いつかは、ここで生演奏を聞いてみたい世界の非常に美しいコンサート・ホール 25 選」で日本国内から唯一選ばれ、9 月に開館 20 周年を迎えたホールである。

今回の研修（19 日）では、通常の研修会と逆に研修生が舞台上のひな壇に座り、指揮者の位置で講義頂くという形での開催であった。

講師の熱い思いや、重要なポイントを間近で感じる事ができたのではないだろうか。

I の基調講演では、「文化庁は変わります」ということで、文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室室長補佐の時川修司氏に、これからの文化庁について詳細にご説明いただいた。



舞台上での講義

II の研修では、世界有数の温泉地として知られる大分県別府市を活動拠点とするアート NPO 「BEPPU PROJECT」の中心メンバーとして活躍されている横山恭子氏にフェスティバルの開催や地域性を活かした企画を通じた、現代芸術の紹介や普及、アートの可能性の普遍化、アートを活用した魅力ある地域づくりの活動を事例を交え熱く語って頂いた。

III の研修では、9 月 23 日に開催された、福井県立音楽堂開館 20 周年記念「越のルビー音楽祭スペシャル」について、製作過程から多くの関係者を巻き込んで開催に至るまで、携わった福井県立音楽堂の橋本恭一プロデューサー、作曲家の星谷文生氏、福井工業大学教授の川島洋一氏にご説明いただいた。映像だけでなく福井県立音楽堂の「越のルビーアーティストバンク」に登録され、9 月の公演にも出演されたアーティストにも演奏でご協力いただいた。そして、全国公文協副会長の田村孝子氏にアドバイザーとしてまとめていただいた。

### 2 研修内容

---

#### 研修会 I（基調講演）「文化政策の動向と今後の展望について」

---

講師：時川修司（文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室室長補佐）

文化庁は創設 50 周年を迎え、京都への移転が決まっている。これからの文化庁についてのポイントは下記の通り。

##### ○文化芸術振興基本法の改正の概要

文化芸術の振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策を法律の範囲に取り組んだり、年齢、障害の有無または経済的な状況に関わ

らず等しく文化芸術の鑑賞等ができる環境の整備や生活文化を取り入れるなどの「文化芸術」の枠の拡大、基本計画の策定などのご説明をいただいた。

#### ○最近の政府の重要方針における文化関係の主な記述

文化の社会的・経済的価値等の創出に向け文化GDPおよび文化芸術資源の活用による経済波及効果の拡大、「稼ぐ文化」へと推進する「文化経済戦略（仮称）」の今年度内の策定についての説明をいただいた。

#### ○新文化庁 これからの展望

- ①機能強化 文部科学省設置法の改正、組織の抜本改編、京都移転
- ②文化政策の手法の多様化 多様な芸術的資源を生かした社会的・経済的価値の創出
- ③2020 オリパラとその後を見据えた政策 文化芸術推進基本計画の策定、文化プログラムの開催

#### ○平成30年度概算要求等

- ・国際文化芸術発信拠点形成事業 ・戦略的芸術文化創造推進事業
- 「劇場・音楽堂等活性化事業」が予算執行状況調査を受け一部見直しをされた事業
- 「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」へ
- ・障害者に対応した劇場・音楽堂等に係る課税標準の特例措置の創設（要望事項）
- ・劇場・音楽堂等を核とした取組事例（4館）の説明をいただいた。

#### ○文化プログラムの実施に向けた文化庁の取組

オリンピック憲章にも「スポーツを文化と融合されることで…」とあるとおり、期間中に複数の文化プログラムを計画しなければならないということで「東京2020文化オリンピック」や「beyond2020プログラム」にぜひ申請していただきたいとお話を頂いた。「文化情報プラットフォーム」、今後の工程のご説明を頂いた。



研修会Ⅰ 講師 時川修司氏

---

## 研修会Ⅱ 「地域 × アート BEPPU PROJECTの活動を事例に」

---

講師：横山恭子（(特非) BEPPU PROJECT／オフィスケイワイ代表）

もともと地元福岡で舞台芸術振興事業の企画・運営を行っていた横山氏は、世田谷パブリックシアターの研修を機に、財団でのダンス事業コーディネータを経てフリーで個人活動もしながら、一大温泉観光都市である別府で、新たな魅力を創出するためにアートを活用し、地域に密着した活動を行っている「BEPPU PROJECT」の職員として別府市に移住し、現在活動されている。

下記の通り多分野にわたる活動をしてきたのがプロジェクトの特徴である。

- ・芸術文化振興事業や学校へのアウトリーチ
- 別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」

①路地など普段立ち入らない場所での作品体験ツアー

毎週、地域の方にひとつひとつ説明に出向いていくことで、「町全体で何かをしている」、「県外からも別府に人が来ている」ということを認識されるようになった。

②永久別府劇場「恐怖の館」

お化け屋敷というわかりやすい題材を取り入れることで、幅広く参加してもらえるようになったし、県外からもボランティアスタッフとして数多く協力していただいた。滞在日数を増やすプログラムを取り入れることで経済効果をあげた。

○「in BEPPU」

若いアーティストに、市役所の中で展示をして、公務中にツアーを行い、街を歩きながら作品を鑑賞するプロジェクト

○「ベップ・アート・マンス」

自宅で開催する写真展など、質や規模を問わずに登録制で開催している。終わった後も別府を訪れる方がいる。

「国民文化祭・おおいた 2018」でも文化事業を展開する「カルチャーツーリズム」にも BEPPUPROJECT が参加している。開催期間だけでなく、いかに地元の文化に触れてもらうか。それをどう発信していくか。

・移住、定住に向けた環境整備事業

「貸間（かしま）」と呼ばれる素泊まりの文化、よそ者を受け入れる別府の気質、風土を、県外、海外からのアーティストを受け入れる環境を古い施設を活用して整備している。120 人も移住者が増えた。

・福祉施設へのアウトリーチ、障害者アート

パラリンピックの開催などもあって、そもそもボーダーとは何かを問う展示やワークショップを開催。たくさんの言葉を読む展示、どうしているかを考えて何が起きているかに触れる。多様な人々が一つの社会に暮らし、共存していくことを感じ、認め合い尊重する。

・新たな観光需要を掘り起こす情報発信事業

「旅手帖 beppu」は人に焦点をあてた雑誌。ここに行くと、この人に会うと別府のいい情報が知れる。泊まれるアート「浜脇の長屋」

・製品のブランディング、六次化事業

「OITA Made」というブランドを立ち上げた（商社は譲渡）。作り手の顔が見える。こういう思いが知れる。芸術や文化は、そこだから育ってきた。その土地の風土を守る必要がある。

・クリエイティブ×企業による産業振興事業「CREATIVE PLATFORM OITA」

技術はあるが、苦しい思いをしている企業をデザイナーや建築家などのクリエイターが入ること、違った視点で課題を解決し、マーケットの新規開拓を目指す。

まとめ

アーティストと出会うことで「市民」ひとりひとりが変化した。催しのスタッフとして参加していくうちに、自ら何かを作るようになり、元気になり勝手に宣伝してくれるようになった一人の「おじさん」が、このプロジェクトが町に与えた影響を物語っている。

- ・アートとは自由なものの見方や考え方を促し「気づき」をあたえる触媒である。
- ・アートは地域の課題を「解決」しない。問題「提起」を行う。
- ・文化、芸術は、都市や地域の暮らし、経済活動において「質」を高めたり、「新たな価値」を生み出していく要素となる。

質疑応答でも、「別府の人はありがたいことに、真剣に叱っていただける。」「アートという言葉を使って、よそ様の場所、時間を使わせていただく、生活の中に踏み込んでいくという点では、ホールの運営とは違うかもしれないが、一緒に作り上げていくという点では同じである」とか、「外に出てみると学ぶことが大きい」、「分野や組織を越えた研修に参加するか、自分で行うことが重要。」「ぶれない信念、忍耐と言葉を持つこと。感覚でしゃべらない。データなどの事実を踏まえた言葉をしゃべると市民と同じ目線で考えることができようになる。」といったポイントを教えていただいた。



研修会Ⅱ 講師 横山恭子氏

何より、横山氏が楽しそうに講義している姿が、別府の人々が自分たちが住んでいる「別府」の魅力を発見し「気づく」ことにつながっていると強く感じた講義であった。

### 研修会Ⅲ 「多分野協働、プロ・アマ協働の可能性と課題」

プレゼンター：橋本恭一（（公財）福井県文化振興事業団 プロデューサー）  
 星谷文生（作曲家）  
 川島洋一（福井工業大学 教授）  
 アドバイザー：田村孝子（（公社）全国公立文化施設協会 副会長）

今年、開館 20 周年を迎えた福井県立音楽堂において、9 月 23 日に「越のルビー音楽祭スペシャル」を開催した。その第 2 部に、福井ゆかりの作曲家・作家・演奏家、県内の中学・高校で美術制作に携わる生徒、映像を学ぶ大学生など多くの人々の協働による「未来の動物の謝肉祭」を上演。

この研修では、その制作過程から上演までを実演を交えて振り返り、コラボレーションのあり方を考察した。

#### 【事業の立ち上げ】

橋本氏：開館 20 周年を記念する事業に何が相応しいかを考え、この 20 年で育ってきたアーティストと、この 20 年に生まれた子どもたちが協働するステージを創りたいと思い立った。

#### <TV の報道特集映像を上映>

星谷氏：作曲家にとっての課題は「如何に聴き手を作っていくか」ということ。スマホな



研修会Ⅲ 橋本氏、星谷氏、川島氏、田村氏(左から)

どで音楽を聴くことが多くなり、コンサートに足を運ぶことが少なくなっている。若い世代に直接関わることによって、新しい表現を開拓することになればと考え参加した。16の学校が自ら手を挙げてくれ、シーンの設定を考えて美術作品を作り、作品に込めた想いを大学生が映像にする「大切な作業」が繰り返された。

川島氏：意欲的な企画だと思って、すぐに参加の意思表示をしたものの、本番に向けてとても緊張した。大学として地域の皆さんのお役に立てることを意識しているが、学生にとっても大いに勉強になった。

橋本氏：今回の企画について、内部に対しても外部に対しても、サン・サーンスさえ知らない人々に対して何を行い何を指すかを説明し理解を得るのが、先ずもって大変だった。

田村氏：サン・サーンスの作品をいじるというある意味「大それたこと」。周りの方を説得するためには、自分の頭の中のことばを選んで出すだけでも大変だったと思う。福井県立音楽堂のこれまでの様々な取組みは、果たしてこれを目的にしてきたのか、延長上なのかという感想を持った。

橋本氏：音楽が好きでない人に如何に興味を持ってもらうかは、プロデュースにあたって常々大切にしている。大抵の人は中身が理解出来なくても、多くの子どもたちが関わっていることで納得してくれた。事業団のトップからは「たくさん参加しただけということだけでは成功ではないぞ。大丈夫か？」と心配されたが、丁寧に説明して理解を得られた。

#### <未来の動物の謝肉祭「間奏曲」の演奏>

##### 【制作過程】

星谷氏：担当する4つの学校で曲に関する言わば授業をした。サン・サーンスの元の曲を説明し当時の時代の風刺的な意味合い、それぞれの曲の説明、美術と音楽の違うところや絶対音楽、標題音楽などについて考える機会を作った。1曲当たり3分の中に凝縮すること、つなぎ目をシームレスにすることであたかもサン・サーンスの曲であるようにすること、作曲家として過去の作曲家のオマージュをすることで楽曲が独立して意味を成すよう努めた。ほかの作曲家たちもそれぞれ個性的な曲作りのコンセプトを持っていて興味深かった。原画をどうやって映像アートにしていくか、映像チームには苦労があったと思う。

#### <原画を投影後、未来の動物の謝肉祭「ペリカン」の演奏>

橋本氏：映像を見ながらタイミングを合わせて演奏しているわけではない。映像側が合わせている。

#### <福井工業大学の学生を紹介>

映像を制作した学生が、映像と合わせたいポイントに伸びしろを持たせつつ2画面を切り替え投影した。スコアを読める学生がリアルタイムで指示していた。

星谷氏：アンサンブルには正解はないように、コラボレーションにも正解はない。どの立場で何を求めるか。絵を描き、映像化し、作曲し、演奏する。どこに焦点を置くかがポイントで如何にバランスをとる



越のルビーアーティストの演奏と映像のコラボレーション

かが大きな課題である。

川島氏：実際に始めると、中高生の真剣な想いを尊重し忠実に伝えるための責任を、学生が強く意識していたようだ。実は殆どの大学生が、本格的な映像を作ったのは今回が初めて。内心「これで通用するのか」不安もあった。本番の4日前に初めて生演奏と合わせたら全く合わない。作曲家が演奏家たちに「もっとゆっくり」などと指示をする度、真っ青になった。結果的には本番では大成功だったのでよかった。

#### 【これまでのつながり】

橋本氏：福井工業大学とは、以前に越のルビー音楽祭「お話と短歌（うた）でつづるコンサート」「季節めぐり、福井のめぐみ」の映像制作で、お世話になった。その信頼関係があって今回うまく行くという勝算が持てた。

星谷氏：11月12日福井大学主催の「これからの福井のアートを考える」シンポジウムではホールと協働している。子どもたちも含めて、もっとアートに触れてほしいが、福井では機会を作りづらい。そんな環境下だからこそ、お互いの信頼関係を連携を通して創りあげている。

橋本氏：これまで福井県立音楽堂では、多文化との共働の取組みとして、音楽朗読劇「銀河鉄道の夜」、宮下奈都氏原作の朗読劇初演（越のルビー音楽祭「お話とピアノでつづるコンサート」）、子どもたちにコロスとして参加してもらう初夏の子どもコンサート「義経と弁慶 勸進帳ものがたり」、「ブレーメンのおんがくたい」などの実績がある。失敗も重ねつつ経験値を増してきた。

#### 【これからについて】

田村氏：アマチュアを上手に短期間で生きるように使っているというのにびっくりしている。積み重ねは非常に大切である。経験していくことで次のステップに行ける。いかにコミュニケーションしていくのかが感動につながる。非常に大切なことである。アマチュアは好きなことを好きにすればいい一方、プロは仕事としているが、それぞれに対して「こうすればいいのに」と感じることもある。それが、一緒にすることによってそれぞれの立場であたり前だと思っていたことがそうではないという「気づき」が生まれる。気づいた課題をクリアしていくことで、ハイクオリティを求めることができる。何が一番大切か。「ハイカルチャー」ではなく「ハイクオリティ」を求めるのが肝だと思っている。

星谷氏：それぞれに犠牲にしなくてはいけないこともある。今回は、最初のリハーサルで録音して映像チームに渡さなくてはいけなかった。本番の演奏だけするのではないプレッシャーがあった。しかし、出会うことがなかった人に出会うと、ものごとを違った視点で見ることができる。

川島氏：大きな苦勞は、完全なアマチュアである中高生と、プロである作曲家や演奏家の間に入ってまとめていなくてはいけなかったこと。要望に合わせて結果を出すプロのデザイナーを目指す大学生たちにとっては、意識を高める点においても貴重な経験であった。

橋本氏：中高生の膨大な作品群は、素材として使うだけではもったいないので、小ホールで美術展を企画し、より多くの人々に観てもらえた。

子どもたちの想いを台本に著した宮下奈都氏は、美術部や映像チームの子どもたちとも接点を持ってくれ、「きれいにまとめなきゃという使命感がプレッシャーだったが、音楽を聴いてみてそれぞれが力を持っていることに安心し、満足した。独りでやるのが普段の私の仕事。それだけに、良い作品を作り上げるため互いに意見を言い合っている現場が気持ちいい、素晴らしいと思った」と仰ってくださいました。

田村氏：まとめ

今回の報告をお聞きになって、ホールが積極的に関われば「できる」ということ、可能性の拡がりを感じていただけたら嬉しい。

日本では残念ながら、芸術は「暇な人」「好きな人」「お金がある人」が楽しむものと捉えられている。「誰もが楽しむものである」「生きる力を育むものである」と認識されていないのは、本当に残念である。国内に、2,000 も公立ホールがあるのは日本だけ。皆さんが一生懸命頑張れば文化が振興し、新しい試みがどんどんできるのではないかな。

今回の美術部の生徒のような方を取り込めば、他の芸術分野にも目を向けるチャンスが生まれる。できるだけ遠い分野、広い分野に及んで声をかける、こういったホールの役割が大切である。日本の文化状況は、今までいわゆる「行政サービス」であって本当の意味での文化政策ではなかった。お金がないからといって、手をこまねいていた。新しいことを始めるときは、周りを説得しなくてははいけない。非常に大変なのは確かだが、ホールをどういう風にしていきたい、創っていきたいという「熱い」ものがあって、その努力を怠らないとことが大切である。

「子どもたちに素晴らしいものを聴かせるという国が取り組んできた事業を地方自治体が担え」ということが事業仕分けであったが、文化関係で文部科学省に11万3千超の抗議のメールがあり、それが力になって劇場法ができた。皆さんの心からの想いが伝わると国が動く、と実感した。それぞれのホールが、地域にふさわしい地域の資源を活かしていかななくてははいけない。越のルビーアーティストバンクのチラシを見ても、写真の写し方ひとつを見ても考えられているし、プロフィールに出身小学校が記載してあることひとつにもアーティストに対するホールの愛情を感じる。

「行政のせい」「予算のせい」「観客のせい」ではなく、皆さんが何をしたいのか何を伝えたいのか、何を創りたいのかが大切である。こういった皆様の気持ちが無かったら、皆さんのホールが生きることはない。全国2,000のホールが頑張ったら素晴らしいレガシーができると思う。

演奏：竹沢友里、川村文雄(pf)

窪田恵美(fl)、豊永美恵(cl)

山崎智里(per)、西口勝(cb)

### 3 研修を終えて

実際に劇場運営に中心になって携わっている方を講師に迎えた結果、受講対象者である「劇場・音楽堂等に勤務する若手職員（経験3年以内）」から、「新鮮な内容でした。」「襟を正していかなければいけないと思いました。」「講座の内容がリアルで興味をそそられるものでした。」などの感想を頂いたことはよかったと思う。

館長レベルの方からも、「いかに幅広い人をまきこんでいくかという統一されたテーマがあり意識が高まった。」「取り上げる内容は異なっても、3つの研修に通底していたのは【多様な人・場所・組織との連携】であった。」と、改めて劇場・音楽堂の地域における意義を再認識していただくことができた。

今後は、福井県立音楽堂でも実施しているが、他館では多くは実施されていない「共同制作の可能性」を探る内容や、スタッフ交流、事業だけでなく情報提供、観客動向、意識調査など多岐にわたる研修の要望に応えることができる研修も検討していきたい。

平成 29 年度文化庁委託事業  
近畿地域アートマネジメント・技術職員研修会実施報告

## 開催概要

事業名	平成 29 年度近畿地域アートマネジメント・技術職員研修会
趣旨	近畿地域の公立文化施設の職員等を対象として、アートマネジメント能力と技術能力の向上に関する専門的な研修を行い、地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資することを目的とする。
開催期間	平成 30 年 2 月 1 日（木）～ 2 月 2 日（金）
会場	神戸市立灘区民ホール 〒657-0832 兵庫県神戸市岸地通 1-1-1
担当施設	吹田市文化会館（メイシアター）
参加人数	38 名（参加施設 18 施設）

## 研修計画・日程

	日時	内容	講師等
2/1 (木)	13:30~13:45	開講式	
	13:45~15:15	講義 1「高所作業における取組・現状・注意点」	講師 大西昭吉氏（大西安全コンサルタント事務所） アシスタント 山形裕久氏（(公社)全国公立文化施設協会コーディネーター）
	15:15~15:35	休憩	
	15:35~16:35	実習 1「高所作業における実践編」	講師 山形裕久氏 アシスタント 大西昭吉氏
	16:35~16:50	休憩	
	16:50~17:50	実習 2「高所作業における実践編」	講師 山形裕久氏 アシスタント 大西昭吉氏
	18:30~20:00	情報交換会	



	日時	内容	講師等
2/2 (金)	9:30~10:00	受付	
	10:00~11:30	講義2「文化庁、京都への移転 これから」	講師 山口荘八氏（文化庁長官官房地域文化創生本部暮らしの文化・アートグループ グループリーダー）
	11:30~11:45	休憩	
	11:45~12:30	実習3「公共ホールにおける良いコンサートを創るための条件」	講師 宮本慶子氏（マリンバ奏者）
	12:30~13:30	休憩	
	13:30~14:40	実習4 パネルディスカッション「公共ホールにおけるコンサートの役割」	コーディネーター・パネラー 延原武春氏（日本テレマン協会） パネラー 古谷光広氏（サクソ演奏者） 松村公彦氏（和太鼓松村組） 宮本慶子氏
	14:40~14:50	休憩	
	14:50~15:35	実習5「ホールの特性を活かした音響ミキシングによるジャズ音楽のアンサンブル」	講師：山形裕久氏 深尾康史氏 演奏 甲陽音楽学院メンバー
15:35~15:45	閉講式		

---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

本研修では、1日目に劇場においての高所作業の現状・注意点を学び、2日目は今後の劇場を管理運営する上で大切な事を各分野の専門家からお話を伺った。

### 2 研修内容

---

#### 講義1「高所作業における取組・現状・注意点」

---

講師：大西昭吉（大西安全コンサルタント事務所）

アシスタント：山形裕久（（公社）全国公立文化施設協会 コーディネーター）

大西安全コンサルタント事務所の大西昭吉氏から「高所作業における取組・現状・注意点」と題して、安全の基本的考え方と変わりつつある日本の法律、高所作業の保護具、ヒューマンエラーと災害防止活動についてお話を伺った。

高所作業での事故が後を絶たない現状の中、墜落防止策として、高所作業床、ローリングタワー、開口部、ピットその他の墜落のおそれのある場所には、手すり、囲い、覆いを設ける。これらの処置が困難な場合は、防網を張り、安全帯取り付け設備を設け、安全帯を使用させる事を学んだ。

これからの安全の基本的考え方として、「災害は人のミスで起こるから教育・訓練でミスをしないようにする」という従来の考え方から、「人はミスをする、機械は故障するという考えのもと、ミスをしたとしても機械が故障したとしても人にとって安全な機械（職場）にする」という考え方変わった。そのため残ったリスクを教育・訓練でカバーできる安全文化を構築する重要性を学んだ。

---

## 実習 1、2 「高所作業における実践編」

---

講師：山形裕久（(公社)全国公立文化施設協会 コーディネーター）

アシスタント：大西昭吉（大西安全コンサルタント事務所）

舞台上でイントレを実際に組み立てながら、高所作業における危険性、転落防止策について議論した。

安全帯をかける、保護帽の着用、囲い・手すり・覆いの設置、加えて囲い等を設けることが困難な場合は防網を張り労働者の危険を防止する措置をとることの必要性を学んだ。

また、完成したイントレに参加者がのぼり、安全帯、保護帽を着用し安全に作業する方法を確認した。



講義 1



実習 1、2

---

## 講義 2 「文化庁、京都への移転 これから」

---

講師：山口荘八（文化庁長官官房地域文化創生本部暮らしの文化・アートグループグループリーダー）

文化庁の組織と業務概要、文化芸術基本法、文化庁の京都への移転についてお話を伺った。

現在、文化庁の本格移転に向けた準備とともに、これまでの文化行政の枠組みにとらわれず、地元の協力を得ながら新たな政策ニーズに対応した事務・事業を先行的に実施するため地域文化創生本部を京都に設置した。

業務内容は、新たな政策課題への対応のための政策調査研究、文化芸術資源の活用による共生社会実現への貢献・人材育成、伝統工芸や生活文化に関する調査研究・施策の検討、文化財等を生かした広域文化観光・まちづくりモデルの開発、文化観光拠点の形成支援、東アジア文化都市やICOM2019 京都大会連携にかかる関連業務等である。



講義 2

---

### 実習 3 「公共ホールにおける良いコンサートを創るための条件」

---

講師：宮本慶子（マリンバ奏者）

長年にわたりマリンバ奏者としてホールに係ってこられた立場として様々な意見を伺った。

宮本氏は神戸ビエンナーレ エグゼクティブディレクター、神戸芸術文化会議常任委員、神戸音楽家協会、兵庫県音楽活動推進会議、サマーミュージックステーション等を立ち上げから関わり、代表や幹事を務められている事もあり、芸術家を束ねる組織の重要性、またホールはそのような組織と協力し事業を実施していく事の必要性を伺った。

宮本氏が求めるホールの役割としては、アーティストに賞を与える機会を作る、観客のマナーを向上させる、非日常的空間を作る等の考えを伺った。

---

### 実習 4 パネルディスカッション「公共ホールにおけるコンサートの役割」

---

コーディネーター・パネラー：延原武春（日本テレマン協会）

パネラー：古谷光広（サクソ奏者）

松村公彦（和太鼓松村組）

宮本慶子（マリンバ奏者）

「公共ホールにおけるコンサートの役割」と題して、演奏者をパネラーに迎え様々な意見をお聞きした。

演奏者の立場からホールに求めるものとして、地元のアーティスト育成、ライブハウスのような小規模なところではなく大きなホールで演奏する機会の提供、アーティストがプロとして生活していける環境づくり、子どもから40代までを対象とした若年層向けの企画を実施、といった意見が出た。

また指定管理者制度に対する意見として、何年かで指定管理者が変更になるのは良くない、地域とのつながりが無くなってしまった、ホール館の連携が無くなった等の意見が出た。



実習 3



実習 4

---

## 実習 5 「ホールの特性を活かした音響ミキシングによるジャズ音楽のアンサンブル」

---

講師：山形裕久（(公社)全国公立文化施設協会 コーディネーター）

深尾康史

出演：甲陽音楽学院メンバー

舞台監督 山形裕久氏、音響監督 深尾康史氏監修のもとジャズ音楽の音響仕込みを学び、その後、世界トップクラスの音楽大学であるアメリカ・バークリー音楽大学との提携校である甲陽音楽学院学生のジャズ演奏を鑑賞した。

一般的なホールにある音響設備でセッティングし、音響のプランニングを勉強した。マイクチェックをしながらホールにあった音作り、ジャズ特有の音作りを学んだ。



実習 5



実習 5

### 3 研修を終えて

今回の研修では、1日目に舞台職員を中心に高所作業における取組・現状・注意点を学んだ。

参加者は高所作業における危険性をあらためて考えさせられ、舞台における事故を未然に防止する良い機会となった。ホールの安心安全を確保していくには今後もこのような研修会を実施していく事の必要性を強く感じた。

2日目は事業課職員を対象に、ホールに係る各分野の専門家からお話を伺い、アートマネジメントについて学んだ。

普段お聞きすることのないようなホールに対する様々な意見を聞くことができ、参加者は今後のアートマネジメントに活かしていただければと考える。また、より良い事業を実施していきたいという強い熱意を参加者・講師から感じる事ができ、大変有意義な時間となった。

平成 29 年度文化庁委託事業  
中四国地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会

## 開催概要

事業名	平成 29 年度中四国地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
趣旨	劇場・音楽堂等の職員などを対象に、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術・生涯学習の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 12 月 7 日（木）～ 12 月 8 日（金）
会場	下関市生涯学習プラザ 〒750-0016 山口県下関市細江町 3-1-1
担当施設	下関市生涯学習プラザ
参加人数	49 名（参加施設 24 施設）

## 研修計画・日程

	日時	内容	講師等
12/7 (木)	13:30~13:40	開講式	
	13:40~15:00	【プログラムⅠ】 「地域における文化芸術・生涯学習 拠点の役割」	講師 新藤浩伸氏（東京大学大学院教 育学研究所生涯学習基盤経営コ ース 准教授）
	15:00~15:10	休憩	
	15:10~16:10	【プログラムⅡ】 「朝鮮通信使と下関」	講師 安富静夫氏（下関市立中央図書 館 館長）
	16:10~16:30	休憩	
	16:30~17:30	【プログラムⅢ】 生涯学習教室体験「大人向けリトミ ック教室」	講師 田辺容子氏（全日本リトミック 音楽教育研究会 山口支部長）
	18:30~20:30	情報交換会	
12/8 (金)	10:30~11:45	【施設見学】 「下関市立歴史博物館～功山寺」	

---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

#### 【プログラムⅠ】

本研修は地域における公立文化施設等をはじめとしたいわゆる箱物の持つ役割を、これまでの各施設の歴史を踏まえ、法制度及び過去の事例から学ぶものとなりました。

また、開催館が生涯学習拠点でもあるので、文化芸術だけではなく生涯学習の観点から、公民館等といった施設についても論じていただきました。

#### 【プログラムⅡ】

本研修は開催地である下関の特性（歴史や国際交流）を活かし、2017年に「朝鮮通信使」がユネスコ「世界の記憶」に登録されたこともあり、中四国の各地域においても国際交流による会館運営・自主事業の発展を目指していただきたいという思いから、ユネスコ登録前から携わっていた講師に、朝鮮通信使の歴史も含めて論じていただいたものです。

#### 【プログラムⅢ】

本研修は開催館が実施している自主事業の生涯学習事業において、どのような内容で生涯学習の提供を市民に行っているか、各地域の参加者の皆さんに感じ取っていただくため、実際に行っている教室の内容をそのままに開催したものです。

各地域の職員の皆さんは平素主催者になることばかりで、参加者になる機会はなかなか無いと思われまますので、参加者側に立つ、という意味でも本研修を開催しました。

#### 【施設見学】

2日目は下関へお越しいただいた参加者の皆さんに下関の歴史を知っていただきたく、下関市立歴史博物館を見学してもらいました。また、博物館近隣の街並みや奇兵隊の決起で有名な功山寺も見学してもらい、より多くの方に下関の名所を知っていただきました。

### 2 研修内容

---

#### プログラムⅠ「地域における文化芸術・生涯学習拠点の役割」

---

講師：新藤浩伸（東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース 准教授）

##### 1. 生涯学習、文化芸術を支える制度

生涯教育は1965年ユネスコで提唱され、高度情報化、産業構造の変化の中で、学校卒業後の学習の必要性が強調され、1980年以降普及しました。

法制度として、憲法、教育基本法で「生涯学習の理念」、社会教育法で「社会教育の定義、国や地方公共団体の任務」、文化芸術基本法で「文化芸術により生み出される様々な価値や文化芸術の礎たる表現の自由の重要性」が規定されています。

また、劇場、音楽堂等の活性化に関する法律に、「劇場、音楽堂等は、文化芸術を継承し、創造

し、及び発信する場であり、(中略)、地域文化の拠点である。また、劇場、音楽堂等は、(中略)、国際社会の発展に寄与する「世界への窓」にもなることが望まれる。」とも規定されています。

## 2. 公共ホールの役割

歴史の中で公共ホールは、明治期は議事堂、演説会場（政治的討議の場）、倶楽部（富裕層の社交場）、物産展示場等の役割がありました。

また、大正、昭和初期は、近代都市を象徴する市民の集会場や、政治家、経済人の地域貢献、民衆教化の場として利用されています。

公共ホールの役割は、人が集まり、文化を楽しみ、思いを共有し、情報発信と交流を行うところです。楽しみを分かち合う場、新しい広場、世界の窓、憲法のいう表現の自由を実現する場でもあります。

また、市民の文化活動の支援をする場、若者世代、地域の課題へのアクセス、NPOによる劇場運営、伝統文化の継承と創造などが考えられます。

## 3. 公民館の役割

終戦直後、公民館は地域の多目的センターとして、村おこしや文化交流、実生活に即した教育や学術文化に関する各種事業を行っていました。

戦後は、社会教育の場として、学習活動を中心としつつも、多様な目的を持った施設として出発しました。1970年代は都市の中の活動拠点として、80年代は多様な活動が行われ、活動拠点として定義する中で学びを公共的に支える意味や公共施設としての機能が問われました。

2000年代はシニア世代の地域デビューの場、防災、助け合いの拠点など、学習以外の様々な機能へ注目が注がれています。

## 4. 生涯学習社会における文化的拠点の可能性

ホールや公民館は、大人のこれまでの経験や学習の振り返りと学び直し場となり、地域や社会に参加し、地域をより良くしていくための学びの場となります。

大人がホールや公民館での出番や役割を持つことで、人生の主人公になる可能性もあります。そのために、施設は市民が作り、市民が主役となる場所である必要があります。

その施設が生きるかどうかは、住民と職員次第であり、地域と住民の成熟が示され試されることとなります。その施設は個人や団体の利害を超えて関係を結び支えあう拠点となるのです。

---

## プログラムⅡ 「朝鮮通信使と下関」

---

講師：安富静夫（下関市立中央図書館 館長）

2017年、朝鮮通信使はユネスコの「世界の記憶」に登録されました。政治的な摩擦が絶えない日韓が200年以上、平和を維持した歴史があるのです。

下関は朝鮮通信使が日本本土に初めて上陸した地です。室町時代に下関を拠点に大内氏をはじめ各層の人々が朝鮮王朝との通交がありました。15世紀後期以降は内乱や将軍家の弱体化に伴う政情不安により、日本での通交の安全が確保できないため、通信使は途絶えました。

江戸時代になり、徳川家は東アジアに対する基本政策を平和外交に改め、中国や朝鮮との国交回復を図りました。

1604年、朝鮮から松雲大師が来日し、京都で徳川家康と対面しました。その後、1607



年から朝鮮通信使が再開することになりました。朝鮮からすると、日本が先に国書を送るべきですが、謝罪などの体面上、正式に国書は作成されませんでした。幕府と朝鮮の間を取り持つ対馬の藩主・宗氏が偽造の国書を作成し、対応した歴史があります。

朝鮮通信使とは、友好を正すという意味で「信」（よしみ）を「通」（かよ）わす（誠の心を通わす）ため、朝鮮から日本に派遣した外交使節団です。將軍家の慶弔や両国間の外交課題の解消を目的としました。

長州藩（現在の山口県）の役割としては総勢300～500人の通信使の接待であり、その費用は多大でありました。下関滞在中の一行に対し、接待の内の一つとして下行と呼ばれる正使から下官に至るまで一人ひとり毎日支給される、今日でいうところの日当のようなものもあり、基本となるものは幕命で決まっていました。饗応料理も萩藩主毛利吉元が陣頭指揮を行い、細やかな気配りを行う等、現代でいうところの「おもてなし」を当時から実行しており、今に繋がる国際交流の基がこの時にすでに完成していたものといえます。

また、朝鮮通信使は本国に、日本の政治、経済、地理、民衆の様子などを記録し、報告しています。「町が人々でにぎわい、商店が屋根を連なり、神社仏閣が岸上に翼飛し、海には商船が群集している」と江戸初期の下関の様子が表現されています。

朝鮮通信使の客館となった阿弥陀寺では、朝鮮通信使が安徳天皇の遺像が安置されている御影堂を見学し、その由緒をただす「壇ノ浦懐古詩」を創作することを慣例としました。このことからわかるように、当時から文化芸術の面での交流も行われていたと考えられます。

平成13年、赤間神宮前に朝鮮通信使上陸淹留の地の碑が建てられました。碑には「今、新たな世紀を迎え、さらなる善隣友好の交わりを構築すべき時にあたり、朝鮮通信使の歴史的意義を再認識し、一行上陸の当地に記念碑を建立」と刻まれています。今後の国際交流の良い例として、朝鮮通信使のユネスコ登録をより多くの方に知っていただき、参考になれば幸いです。



プログラムⅠ



プログラムⅡ

---

### プログラムⅢ 生涯学習教室体験「大人向けリトミック教室」

---

講師：田辺容子（全日本リトミック音楽教育研究会 山口支部長）

平素自主事業や田辺先生がご自身の教室で開催されているものと同じ形で、内容を少し大人の方に向けにした講座内容で、1時間程度リトミック教室を実施しました。

田辺先生は通常下関市生涯学習プラザにおいて、子供向けリトミック教室を開催されていますが、本研修の参加者の皆さんの年齢等を鑑みて、内容を大人の方に向け、音楽に合わせた簡単な

運動に変更し、皆さんでの歌唱を行う時間も設けました。

リトミックは幼児期や学童期にとくに重要な教育です。音楽を聴きながら体を動かすので、知らず知らずに楽しみながら、集中力が身につくというものです。

そのリトミックを受講生の皆さんに体験していただきました。皆さんは動きやすい服装でリズムに合わせて教室内を回り、手をたたき、あるいは歌を歌いながら、体験していただきました。

二つの座学研修の後ということもあり、身体を動かす研修で皆さんのお体をほぐしていただく効果も期待しての内容となりました。



プログラムⅢ



プログラムⅢ

---

## 施設見学「下関市立歴史博物館～功山寺」

---

下関は源平最後の戦いとなった壇之浦の合戦があったこと、戦国時代は大内氏から毛利氏へ大名が移る中、下関長府藩は毛利元就の孫にあたる毛利秀元が初代藩主として長府藩を治めたこと、下関戦争において当時使われていた大砲の展示や、来年は明治維新から150年を迎えるが、高杉晋作が奇兵隊を組織して明治維新の原動力となったこと、昭和になり、釜山連絡船の就航や関門鉄道トンネル開通などの説明がなされました。

また、当日は特別展として「龍馬が見た下関」と題し坂本龍馬と下関の関わりを取り上げた展示会が開かれていました。その後、高杉晋作が奇兵隊を決起した功山寺を訪れ、下関の歴史を感じていただけたのではないかと思います。

### 3 研修を終えて

#### 【プログラムⅠ】

本研修では公民館を含めた各種公共施設の役割についての話を皆さんに聞いていただいたが、開催館のようなホールと公民館の複合施設のような会館はあまり数が無く、必然的に参加者もそういった職員の方は少なかったように思います。

アンケート結果でも、「やや理解できた」という回答が最も多く、ホール機能のみの会館職員さんにはなかなか事例になじまない部分もあったかもしれません。しかしそのような中でもホールと公民館的機能を持った会館の役割に大きな違いは無く、それらを理解し、各地域の皆さんに還元出来る部分はあったように思います。実際にアンケート結果でも「ホールが持つ役割について考えさせられた」という回答もあり、今後の各地域での新たな取組が期待できるものと存じます。

当館においても本研修で話のあった内容を、職員全体で共有し、今後の会館運営及び自主事業に役立てていきたいと考えております。例えば、今のところ自主事業の生涯学習事業では、親子向けや年配の方向けの各種講座は開催していますが、中間層（30代～40代）やシニア向けの講座についても検討していき、幅広い生涯学習事業を実施していくことにより、より多くの世代の方たちが集まり、情報や感動を共有できる施設へと発展していければと存じます。

### 【プログラムⅡ】

本研修を各地域のアートマネジメントに当てはめて考えると、文化芸術の国際交流というところに行きつくものと思います。

下関では研修内容にあるように古くから国際交流が実施され、現在の交流における礎が築かれていたといえます。しかし中四国の各地域においては必ずしも国際交流を奨励していくことの出来る環境や立地条件とはいえず、それぞれの抱える課題や状況も違いがあると感じています。ですので、本研修での内容はあくまで参考としていただき、各地域の文化芸術発展に寄与できる国際交流に向けて、各館で話をしていただき、今後新たな国際交流を結び地域の発展に繋がる新しい風を入れ込んでもらう、その一端になれば幸いに存じます。

研修の内容としては、アンケート結果からもわかるように参加者の皆さんの多くに満足していただき、下関の歴史や風土を少しでも感じていただけたものと考えております。当地域では自らの広報・PRを、各地域の皆さんと比較すると、上手に出来ていない面があります。今回の研修を開催した経験を活かし、今後はより自らの広報にも力を入れ、文化芸術の発展に貢献できるよう努めてまいりたいと存じます。

### 【プログラムⅢ】

本研修では主に二つの研修としてのテーマ（目的）があったと考えています。

一つ目は生涯学習という、通常のホール職員の方はあまり実施経験が無い、もしくは全く触れたことのない文化芸術に触れていただく目的です。プログラムⅠの内容においても現代社会における生涯学習の重要性や役割が論じられましたが、やはり通常のホールでは実施することが少ない文化芸術といえます。そのような状況で当館としてはより多くの方に「生涯学習とは何か」という段階から知っていただき今後の会館運営等に役立てていただきたく、そのためには座学だけではなく実際に生涯学習というものの内容をご自身で経験していただくことにより、今後の各地域での自主事業の発展に、実体験ゆえの経験も踏まえて、少しでも寄与出来ればと考えております。

二つ目は参加者の立場に立って文化芸術に触れていただく目的です。私どもも含め通常会館職員は主催者となりますが、お客様になる（〇〇教室の参加者になる）機会はあまり無いと思います。そのような中で参加者として皆さんに教室の生徒とさせていただくことにより、それぞれの職場で主催者に戻った際に、「ここはこのような対応の方が親切で良かった」や「休憩時間の有無、長さ」等の、参加者として感じた部分をそれぞれの自主事業で活かして、より良い形で各地域の市民へ還元していただければと存じます。

アンケート結果では大変多くの皆さんに満足とご理解を頂けており、当館としても生涯学習の周知・発展にますます貢献できるよう、今後開催される他地域での研修会や交流会に積極的に参加し、生涯学習事業での市民の皆さんのお声をご紹介することにより、多くの会館で生涯学習が取り上げていただけるように努力してまいりたいと存じます。

### 【施設見学】

本見学では下関の持つ深い歴史を、最新の施設で学芸員の方たちによる説明の基に学んでいただきました。下関は源平時代の頃から戦国時代、幕末、終戦後～現代に至るまで多くの歴史的な

事件や人物が登場している地で、国内はもとより海外からも多くの観光客で賑わっています。しかし、それらの観光資源は意外にも地元住民はあまり意識していない部分もあり、より街ぐるみでの広報等が必要になっております。

当館を含め各施設職員の皆さんは同じく「集客」という課題を抱えており、その課題解決の一端には観光集客という方法があるかと思えます。この度の施設見学ではそれら観光資源の広報等について、歴史博物館及び長府地域の取組を参考にいただき、それぞれの地域へ持ち帰って、より良い街・観光の広報に繋げていただくとともに、公立文化施設での集客といった面での一つの解決策としていただければと存じます。



施設見学



施設見学

平成 29 年度文化庁委託事業  
九州地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会

## 開催概要

事業名	平成 29 年度九州地域劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会
趣 旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行う研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	平成 29 年 9 月 15 日（金）～ 9 月 16 日（土）
会 場	熊本県立劇場 〒860-0971 熊本市中央区大江 2-7-1
担当施設	熊本県立劇場
参加人数	69 名（参加施設 45 施設）

## 研修計画・日程

	日時	内容	講師等
9/15 (金)	13:20	開会	
	13:30~16:30	セミナー1「地方公共ホールにおいて今後取組が求められる社会包摂事業について」 ～実践例、成果と課題について語る～	コーディネーター 大澤寅雄氏((株)ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室)  パネリスト 古賀弥生氏(アートサポートふくおか代表) 柏木陽氏(NPO 法人演劇百貨店 代表) 野尻明子氏(熊本保健科学大学 講師) 本田恵介氏(熊本県立劇場 事務局長) 嶺浩子氏(熊本県立劇場 専門員)
	17:30~19:30	情報交換会	
9/16 (土)	10:00~10:20	報告「熊本地震からの復旧報告」	講師 牛島真吾氏(熊本県立劇場 事務局次長)
	10:20~12:20	セミナー2「熊本県重要無形文化財・清和文楽人形芝居について」 ～ホールと地域伝承芸能団体の連携、その実践例と考察～	対談 渡辺久氏((一財)清和文楽の里協会) 本田恵介氏(熊本県立劇場 事務局長) ミニ公演「傾城 阿波の鳴門」 ワークショップ (一財)清和文楽の里協会
	12:20~12:30	閉会	

---

## 研修会記録

---

### 1 はじめに

今年度施行された改正文化芸術振興基本法（文化芸術基本法）でも謳われているとおり、文化芸術は福祉や教育、まちづくり等、様々な分野への活用・連携が期待されている。これらを受け、地方の公共ホールにおいても今後取り組みが求められる社会包摂事業について、その実践例を挙げつつ、成果や課題等について議論しようと考えた。

また、公共ホールにとっては、地域の伝承芸能の保存・継承もまた大きな使命と言える。公共ホールとして、伝承芸能保存団体とどう連携し、保存・継承・発展に取り組んでいくべきなのか。熊本県重要無形文化財「清和文楽」の例について考察するとともに、ミニ公演の実施でその魅力に触れてもらった。

併せて、熊本地震被災以降の熊本県立劇場復旧状況を報告。複雑な工程管理を必要とする復旧工事や休館に伴う使用料返還対応、危機管理マニュアルの見直し、復興支援事業の立ち上げ等を具体的に示すことで、危機管理意識向上の一助になればと企画した。

### 2 研修内容

---

#### セミナー1「地方公共ホールにおいて今後取組が求められる社会包摂事業について」 ～実践例、成果と課題について語る～

---

##### ●基調講演「地域社会と公共ホール」

～ホールが社会を包摂するために・ホールが社会に包摂されるために～

講師：大澤寅雄（(株)ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）

##### ①文化・芸術の社会への活用

近年、文化・芸術は、地域の安心・安全や福祉、教育、まちづくりなど、幅広い分野において様々な行政効果を発揮するようになってきた。

東日本大震災を経て、改めて地域における文化・芸術の役割や重要性が浮き彫りになり、公立文化施設の役割について「文化的commons」（地域の共同体の誰もが自由に参加できる文化的営みの総体）というキーワードが導き出された。

公立文化施設の事業や運営等に携わる人材にはこれまで以上に幅広い能力や経験等が求められるようになってきており、コーディネーターとなる人材の育成・確保やその活動基盤の整備が大きな課題となっている。



セミナー1 大澤寅雄氏

##### ②アウトリーチと地域文化の生態系

公共ホールに地域住民の税を再配分することの意義を考えると、文化・芸術への興味や関心の高い「一部の市民」に限定せず、その公共の財産を共有する取り組みは必要不可欠である。

自然環境の生態系のような、地域に文化的な営みの循環を生み出すことが公共ホールに求められる役割であり、循環の起点や連鎖の中継となるような、能動的役割が期待される。

その循環を生み出し、広げることが「コーディネーター＝文化的コモンズの担い手」である。さらに言えば、コーディネーターとなる人材が地域に確保されていることが、公共ホールの存在意義でもある。

### ③公共ホールの大規模改修問題

1990年代に竣工した公共ホールが、2020～2030年代にかけて大規模改修の時期を迎えた際に、建設当時の社会背景とは大きく異なるため、その存続をめぐる論議が各地で起きるだろう。公共ホールの存続の意義が厳しく問われ、それに見合った実績や成果が評価されることになる。公共ホールに住民の税を再配分することに、説得力のある説明が求められる。

「公の施設」とは「住民の福祉を増進する目的をもってその利用に供するための施設」である。文化・芸術を通じた「住民福祉の増進」に適う活動を、税の再配分という観点から見直す必要に迫られるだろう。

### ④高齢社会における公共ホール

著しい高齢化が進む日本において、行政の様々な政策で高齢社会に対応した取り組みが求められており、それは文化政策においても例外ではない。

地域の公立文化施設では、鑑賞事業や参加型事業の来場者、また地域交流事業の対象者も高齢者の占める割合が高まってきており、今後、高齢社会を視野に入れた取り組みがこれまで以上に期待されている。

公共ホールとして、高齢社会に対して、文化・芸術を通じた「住民福祉の増進」に適う活動を行うことが求められており、それは地域社会における公共ホールの存在意義をアピールするチャンスでもある。

### ⑤地域社会と公共ホール

公共ホールが、社会を包摂するために・・・「社会的に弱い立場にある人々をも含め市民ひとりひとり、排除や摩擦、孤独や孤立から援護し、社会（地域社会）の一員として取り込み、支え合う」ために、公共ホールは何ができるのか、考える。公共ホールが、心理的、物理的、経済的な「社会的排除」に加担していないかどうか、考える。

公共ホールが、社会に包摂されるために・・・公共ホールが、文化・芸術への興味や関心の度合いに関わらず、市民ひとりひとりから、理解や信頼や支援を受けるためにできることを、考える。公共ホールが、心理的、物理的、経済的に、地域社会にとっての必要性を理解してもらうためにできることを、考える。

## ●事例発表「高齢社会における熊本県立劇場の取り組み」～地域をむすぶアートプロジェクト～ 発表：嶺浩子（熊本県立劇場 専門員）

## ●パネルディスカッション

コーディネーター：大澤寅雄（(株)ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）

パネリスト：古賀弥生（アートサポートふくおか 代表）

柏木陽（NPO 法人演劇百貨店 代表）

野尻明子（熊本保健科学大学 講師）

本田恵介（熊本県立劇場 事務局長）

嶺浩子（熊本県立劇場 専門員）

熊本県立劇場の社会包摂事業「地域をむすぶアートプロジェクト」の事例報告のあと、同事業で講師を務める柏木陽と、連携して事業にあっている熊本保健科学大学の野尻明子らが、その効果や課題、今後の展望について意見を交わした。この事業は子どもへの演劇アウトリーチから進展しており、熊本保健科学大学と連携することで、医療系の大学生や作業療法士とのワークショップ研修といった、介護現場で活用するための手法開発へと展開。アーティストが実際にワークショップにいく方法では限界があるため、介護現場で仕事をしている人々にアートの手法を持ってもらうことで、ワークショップの実施に持続性を持たせようとしている。



パネルディスカッションの様相

また、古賀弥生によるアートサポートふくおかの「フォーラムシアターによるホームレスの就労自立支援」や「高齢者施設への芸術家派遣事業」の事例紹介もあった。

---

## 報告「熊本地震からの復旧報告」

---

発表：牛島真吾（熊本県立劇場 事務局次長）

- 1 熊本地震発生時の様子
- 2 被災状況と対応経過
- 3 主な施設被害
- 4 被災後の取組
- 5 今後の予定と、業務の見直し
- 6 復興支援事業「アートキャラバンくまもと」と文化活動支援寄付口座の設置

---

## セミナー2「熊本県重要無形文化財 清和文楽 人形芝居について」～ホールと地域伝承芸能団体の連携、その実践例と考察～

---

対談：渡辺久（（一財）清和文楽の里協会）  
本田恵介（熊本県立劇場 事務局長）

「清和文楽」の歴史をまとめたDVD視聴の後、清和文楽と劇場と連携事業についての対談を実施した。

清和文楽と県立劇場との出会いは昭和63年頃。当時の館長の鈴木健二が県内各地の地域文化を掘り起こし、清和文楽の支援活動をスタートした。これまでに県内各地での公演や、沖縄・東京といった県外での公演をプロデュースしたほか、新作浄瑠璃「阿蘇の鼎灯」の制作に協力。今年度も地域伝統芸能育成事業として宇土市での公演を予定している。



対談の後、人形遣いのワークショップとミニ公演「傾城 阿波の鳴門」の上演が行われ、参加者に清和文楽の魅力にふれてもらった。



人形遣いワークショップ



ミニ公演「傾城阿波の鳴門」

### 3 研修を終えて

#### ①事業評価

「社会包摂」「地域伝統芸能の保存・継承・発展」という、地域の公共ホールが求められる事業に焦点を当て企画。参加者からは「文化ホールの存在意義が問われる昨今、社会包摂をテーマにした運営は、地域の支持者を増やすためにも急務と考える」「社会全体に関わるホールという存在の在り方について考えさせられた」との声が寄せられた。また、熊本県重要無形文化財の清和文楽の上演も好評で、「初めて清和文楽を拝見したのですが、声色ですべての感情が痛いほど伝わってきて、物語の中に引きこまれました」等の感想があった。

#### ②研修会の意義

実際の社会包摂事業の成り立ちや発展の経緯を紹介することで、現在社会包摂事業に取り組んでいないホールも事業実施についてイメージすることができたように思われる。実施には予算や人材の確保で課題があるとされるが、具体的な事業費やノウハウについての質問もあり、実施に前向きな姿勢が見受けられた。また、清和文楽については初めて観たという参加者も多く、良い機会が提供できたように感じられた。

#### ③今後の課題について

「地震の報告をもっと聞きたかった」「清和文楽の対談が足りなかった」といった意見もあった。熊本地震の報告も盛り込んだことから結果的に3分野にわたっての研修となったため、スケジュールがタイトになってしまった。ひとつのテーマに絞り、かつ多角的な視点でカリキュラムを考え、内容を掘り下げていくことも検討したい。